

千年余

千年余点しきたりし法灯の幽玄なるを除夜のテレビに

蘇生

月照れば冬にも池に蓮の花 朝日はかかく山の法燈

深海鮫鯨

動く時あれよあれよとの動く枯蓮なんか見ていられん

ぎを

汚れなき蓮葉の原理まなざしの熱き具体化科学の展望

れん

汚れなき悪戯の果て橋の上なにが流れる母者に逢うか

海月

雪原を黒く一筋南へと野川は流れ流れ消え行く

弁慶

流れゆくもの欲望と陽水が歌った河を泳いでみるか

ぎを

ゲレンデに望みの雪が降りすぎて人智も欲も儘にならざり

蘇生

雪五尺六尺九尺積もれども小千谷縮の砧の音かな

弁慶

豪雪の重みに柱きしみたる春を待ち侘ぶ砧哀しき

真奈

雪と寒さ筆に尽くせぬほどだったと今は思う待つだけだった

蘇生

ゆきの暗きゆきの冷たき夢にみる人はなにゆえ北を唄うか

海月

「帰りたい風景」北へ北へ逃げる青年雪夜の浅虫温泉

ぎを

雪は降り人は露天のぬるま湯に醒めゆく酒を悔ひまた惜しむ

深海鮫鯨

夢多き若きは何故か北を向くまどろむ日々われは老いたり

蘇生

星と風と空を歌ひて獄死せる恨の詩人の冬の断章

真奈

腹だして猫の寝る夜の哀しさよちつぽけ胸に風が吹いたか

海月

酒あほり虎なる猫を軽く見て風に嘯く鼠の詩人

深海鮫鯨

木犀の上枝に笑う猫がいる所詮虎には木は上れんと

ぎを

野良猫が用を足すべくわが庭のひたい如きを右往左往す

蘇生

蠟梅のひと花開き始めたりちいさきちさき庭なれど今朝

寂

蠟梅を一枝入れた粋な人新年会のプレゼント交換

雛菊

ふきのとう今年の雪はすごかろう土蔵の一茶かげんはいかが

海月

奥信濃雪は五尺の栖にて一茶の春はどの位かや

真奈

今生の果ての血気を受け入れて一茶の魂雪へと還る

ぎを

思へらく佐渡を遠見の良寛堂ふり積む雪に訪ふも無からん

蘇生

重荷負ふ者よお出でと主の腕されど塞がる雪国の道

文枝

帰省してゆぎおろししてほしいども子は子で生活あるはんでなあと父 雛菊

雛菊

せつねえですて故郷言葉聞くとときにはの湯屋の煙突ちちははと描くです海月

海月

あの頃の雪としばれが切なくていらぬよ雪は青空がいい

蘇生

春よ来いともかくにも東風こちよ吹け雪を蹴散らしみな海に追え 深海鮫鯨

深海鮫鯨

福寿草蠟梅満作さきがけの春は黄金のペンタクルA

ぎを

うるをもつ大桜木の枝々が黒味をまして春を兆せり

蘇生

冬櫛梢の先々細やかに支える幹の裸形美し

真奈

巻きあがる電線青テント傾く裸形のおつさん般若心経

海月

交差する電線幾つあやなしてスペースアート宙

そら

電線に凍雀並べば春が来て梅に花あり人に風あり

深海鮫鯨

光りみな昨日の雨に洗われて寒の草木が春めきてをり

蘇生

コゝんな全山春よ苔光り脇芽出したる屋久杉の斧

海月

数日の寒には温き雨降りて日ごと伸びたり梅の枝先

蘇生

梅咲いて庭に鶴無く盗みしは春風なりと亭主のたまふ

深海鮫鯨

ざざざんと篠竹ゆする北風にねこ呆然とサイレン聞こゆ

海月

北風に揺るる枝にも芽がはらみ紅梅盛る日も遠からじ

蘇生

東京も明日は雪の町になる悩める人よ安けく眠れ

ぎを

夢醒めてまこと世間は雪のなか布団に巢籠もる我も君も

深海鮫鯨

夜明けても止むことのなき雪道を真つ赤な傘がならび行くなり

蘇生

少納言よ香炉峰の雪いかにと尋ねし定子の声の優しき

弁慶

森森と香炉に雪の降る夜はまこと銀河が天より落つる

深海鮫鯨

香こもる寺苑のみちを歩みたり桜さかりのわかれぞ遠く

れん

白梅に先立つ紅のふくらみに香りたつ日を心待つなり

蘇生

残り雪肉球捺して猫のゆく紅と見しきみが泪や

海月

さざ波のひねもす如く降る雪に弓なる浜は白く染まりぬ

蘇生

メルヘンはもう歌へない冬の海六本木ヒルズ鰐の悲鳴が

真奈

苦学あり功立てむの思い善くも金では買へぬ徳ぞ哀しき

深海鮫鯨

心まで買うると言いし冒澆を咎め立てなき世上哀しき

蘇生

黄金の牡牛に群がる群集は地上の縮図モーゼはどこに

ぎを

牛もまた輪廻転生の階踏まば何れ天にて菩薩とならむ

深海鮫鯨

階梯を昇りて月に届かんか継ぐのはなにか猫かも知れん

海月

明け暗れの星へ伸べたる冬の木が影絵の如く旧正の朝

蘇生

月あらぬ旧正に買ひ月餅を豊かな頬の君に送らむ

深海鮫鯨

明けいろのあかくそまりし明けくれの明くる明りに明けのあかぼし 蘇生

明野町ふと甦^{かへ}りくる記憶あり幾十年の束の間なりき れん

行き違いすれ違いては別れゆく束の間佇むちまたよ今生 ぎを

今生の別れとなるや八衢の行き交ひ繁き人にまぎれて かわせみ

煙突に薄煙立つ夕焼空無言の列に紛れ切れない 海月

切なさの涙噛みしめ追いゆけば振り返らずに遠ざかる背よ 茉莉花

求むべき西の浄土に旅立たむこの世の花は雨に譲らむ 深海鮫鯨

掌に西方の蝶遊ばせて飛天の楽に笑まふ弱法師 真奈

なにげなく東に向けた飛蚊の目まばらに笑みし紅の梅が枝 蘇生

億万の雪片ふりつむ夜の道うしろを向いてもうしろはうしろ ぎを

そんな夜は志ん生なんざ聞きながら蒲団被ってひとり泣くんさ 海月

昨今は男泣きこそ減りにけり女に振られ猫が鳴きをり 深海鮫鯨

美しき五月を待とうたびら雪ねんねこ火燧の子猫のように ぎを

キリコキリコ順三郎のクレータ焼だんだん子猫あいさつ 海月

寒の朝ふと思いたりのら猫に丈の雪ふる北では如何 蘇生

黒猫に雪降りゆかばブチとなりやがては白き野に消へゆかむ 深海鮫鯨

春泥に足をとられて新調の淡き上下がブチとなりぬる 蘇生

風寒く名のみ春に倦む人よ光の春に眼睛らせよ ぎを

薄氷を割りて水浴む雀子の尾羽根きららに春の光が

かわせみ

問われればスギの花粉を閉じ込める名のみ春を今は所望す

蘇生

春なれば空也てふ僧歩みゆきすずめいろどき水は温いか

海月

さよならが近づいてきぬポインセチアの色黒ずみて早春の光

かげ

花はくる人に白髪の定めあり髑髏にあるは万寿の愁ひ

深海鮫鯨

人生は別離に足るや花ふふむ二月逃げるな三月去るな

ぎを

春愁の季(とき)とはちかしも如月の雨の夜明けを鳴く猫の声

たまこ

季を超へさきもりびとの声聴こゆ妻の恋しふて野芹摘んと

海月

過ぎし日に確かあったと懐かしく記憶を探るわれをわれ見る

蘇生

われを見るわれをばここに名付けなば純粹自我と呼ぶにしかずや

深海鮫鯨

考ふる葦となるべく如月の岸边に葦は生ひそむるかな

かわせみ

ふさなりの丸み手のうち鬼胡桃実も葉も剥がれて川岸に立つ

ぎを

破れ舟の亀鳴きをりき汽水域渡らんかいね月も出たれば

海月

夜の喇叭右も左も月の色をみなの系の海が恋しい

真奈

たぶん海を湛へてをらむ寒の夜の窓に滲めるあの蒼い星

たまこ

トウテクウー夜の喇叭に応ふるや嫦娥つぎのをみなはこよひ舞ひ舞ふ

かわせみ

冴え返りゆるみ返つて夜気さやか素手ともなれば手が手を慕う

ぎを

いたみある吾のまえに君あらはれて素手となりにし荷づくりくれき

れん

暮の舞ひ美といふものの哀しいに吾かにもあらぬ兎と杵の

海月

老いやすき少年なれど志もちて舞ふらん暮となりても

真奈

今更と思えどゴルフレッスンの褒めの言葉の嬉しきことを

蘇生

老耄の渚に微笑むこの母がピアノを教へて厳しかりにき

たまこ

桃李和歌連作百首歌集

第七一〇一首より七二〇〇首迄

平成一八年一月四日より平成一八年二月一六日